

2011 June 3  
**Christophe Rousset**  
**Récital de Clavecin**

主催/オワゾリール会 Atelier Marc Ducornet  
 協賛/エールフランス航空 BNP パリバ証券株式会社  
 後援/フランス大使館 東京日仏学院 茨木商工会議所 茨木市観光協会  
 茨木市音楽芸術協会 社団法人茨木青年会議所  
 協力/(財)茨木市文化振興財団



**クリストフ・ルセ**  
 Christophe Rousset

1961年、フランスのアヴィニオン生まれのチェンバロ奏者。指揮者。古楽アンサンブル「レ・タラン・リリーク」主宰。少年時代にバロック芸術に開眼、13歳でチェンバロ奏者を志し、ユゲット・ドレフェス、ケネス・ギルバートらにチェンバロを、クイケン兄弟らに室内楽を、グスタフ・レオンハルトに演奏学を学ぶ。1983年、第7回ブルージュ国際チェンバロ・コンクールで71年のスコット・ロス以来12年ぶりに第1位を獲得。同時に聴衆賞も得て鮮烈なデビューを飾る。その後ウィリアム・クリスティ率いるレザール・フロリサンに通奏低音奏者として活躍するとともに、名だたるバロック・アンサンブル、演奏家や指揮者と共演した。日本を拠点として寺神戸亮、上村かおりと組んだ「東京バロック・トリオ」も人気を博した。91年、「レ・タラン・リリーク」を創設し指揮者としてデビュー。バロック・オペラの数々の復活上演に力を注ぎ、今やヨーロッパ各地のオペラ劇場に欠かすことのできない、フランスを代表する最も多忙なマエストロの地位を築いている。映画「カストラート」の音楽監督としても手腕を発揮しルセは、古楽奏者としては最も多くCD、DVDをリリースしている一人。1997年には北とびあ国際音楽祭において、ラモーのオペラ・バレエ《アナクレオン》の日本初演を指揮したことも記憶に新しい。近年は音楽研究にも精力的に携わり、ラモー作品のクリティカル・エディションやモノグラフを出版。アカデミ・アンプロネー、フランス青少年バロック・オーケストラ、アトランティック青少年オーケストラ等において後進の育成にも力を注いでいる。フランス共和国芸術文化勲章オフィシエ、国家功労勲章シュヴァリエを受勲。

【大阪公演】6月3日(金) 19時開演 茨木市クリエイティブセンター・センターホール  
 お問い合わせ: オワゾリール会 info@loiseau-lyre.com Tel. 072-633-7276 (井岡)

## クリストフ・ルセのCD

好評発売中

---

**早世の天才、ルイ・クーペラン作品集**

**L. クーペラン (c.1626-1661) : 作品集** 演奏曲目収録

[CD1] 組曲へ長調、組曲ト短調、組曲ハ長調  
 [CD2] 組曲ハ短調、組曲二短調、組曲イ短調、パヴァーナ(嬰へ短調)  
 クリストフ・ルセ [チェンバロ / Louis Denis 1658年(ラインハルト・フォン・ナーゲルによる修復(2004-05年))]  
 録音: 2009年7月

**鬼才ルセ、縦横無尽にバッハを斬る!**

**J.S. バッハ: 幻想曲集**

①幻想曲 イ短調 BWV 922 ②幻想曲とフーガ イ短調 BWV 904 ③前奏曲とフーガ へ長調 BWV 901 ④最愛の兄の旅立ちに寄せるカプリッチョ BWV 992 ⑤前奏曲、フーガとアレグロ 変ホ長調 BWV 968 ⑥アタージョ〜ヴァイオリン・ソナタ ハ長調 BWV 968 より ⑦前奏曲と小フーガト長調 BWV 902 ⑧前奏曲とフーガ イ短調 BWV 894 ⑨イタリア風アリアと変奏 イ短調 BWV 989  
 クリストフ・ルセ [チェンバロ / Ioannes Ruckers 1632~1745年大々的磨き直し(パリ)]  
 録音: 2009年7月 / ノイシャテル博物館にて録音

---

**リュリ生涯唯一の大成力作「ベレロフォン」**  
**ルセの完璧無比な復活蘇演が登場!!**

**リュリ: 歌劇「ベレロフォン」**  
 クリストフ・ルセ (指) レ・タラン・リリック  
 録音: 2010年12月、パリ (ライブ録音)  
 AP 015 (2CD)

---

**AM 196 (6CD)**  
**J.S. バッハ: 作品集**  
 イギリス組曲(全曲)録音: 2003年2月、フランス組曲(全曲)録音: 2004年2月ほか  
 クリストフ・ルセ(チェンバロ)

**AM 125**  
 「バッハ王朝」〜 J.S. バッハ、C.P.E. バッハ、W.F. バッハの作品  
 J.S. バッハ: チェンバロ協奏曲二短調 BWV 1059  
 C.P.E. バッハ: チェロ協奏曲イ長調 Wq.172、交響曲ハ長調 Wq.182 / 3  
 W.F. バッハ: フルート協奏曲二長調 Br WFB C 15  
 クリストフ・ルセ(指揮 & チェンバロ)&レ・タラン・リリック、酒井淳(Vc)、ジョスリン・ドービグニー(F)

**AM 148**  
 フローベルガー (1616-1667): 組曲集  
 組曲第2番二短調、第7番小短調、第8番イ長調、第9番ト短調、第10番イ短調、第12番ハ長調  
 クリストフ・ルセ(チェンバロ) 使用楽器: Ioannes Couchet (アントワープ1652年、1701年フランス)  
 録音: 2007年2月

**naïve**

---

お問い合わせ/輸入・販売元: 株式会社キングインターナショナル TEL 03-3945-2333

**ルイ・クーペラン**  
 Louis Couperin (c.1626-1661)

**クラヴサン組曲 ニ短調**

**Suite en ré mineur**

- プレリュード Prélude
- アルマンド Allemande
- クラント Courante
- サラバンド Sarabande
- カナリ Canaries
- ヴォルト Volte
- 牧歌 La Pastourelle
- シャコンヌ Chaconne

**フランソワ・クーペラン**

François Couperin (1668-1733)

《クラヴサン曲集》第3巻 第17組曲 ホ短調

Troisième livre de pièces de clavecin Dix-septième ordre en mi mineur

- 威厳 別名フォルクレ La Superbe ou la Forqueray
- 小さな風車(ロンド) Les Petits Moulins à Vent
- 小さな鐘(ロンド) Les Timbres
- クラント Courante

パニョレのかわいい乳しぼり女たち Les Petites Chrémères de Bagnolet

**ルイ・クーペラン**

Louis Couperin (c.1626-1661)

**クラヴサン組曲 ハ短調**

**Suite en do mineur**

- プレリュード Prélude
- アルマンド ラ・プレシューズ Allemande la précieuse
- クラント Courante
- サラバンド Sarabande
- ジグ Gigue
- シャコンヌ ラ・ベルジュロネット Chaconne la Bergeronnette

**フランソワ・クーペラン**

François Couperin (1668-1733)

《クラヴサン曲集》第2巻 第8組曲 ロ短調

Second livre de pièces de clavecin Huitième ordre en si mineur

- ラファエル La Raphaèle
- アルマンド オーゾニエヌ Allemande l'Ausoniène
- 第1クラント Première Courante
- 第2クラント Seconde Courante
- サラバンド 無比 Sarabande l'Unique
- ガヴョット Gavotte
- ロンド Rondeau
- ジグ Gigue
- パッサカリア(ロンド) Passacaille
- モラン嬢 La Morinète

使用楽器: M.デュコルネ、1995年製作 フレミッシュ二段鍵盤チェンバロ  
 モデル J.リュッカーズ、アントワープ1624年  
 (フランス コルマール、ウンターリンデン博物館所蔵)  
 調 律: Carey Beebe ケアリー・ビービー ピッチ: a'=415Hz

## フランス的な美しさ

### 荒川恒子

フランスに来て初めて自分はフランスの風土気候の如何に感覚的であるかを知った。

夏の明るさ、華やかさに引変えて、秋が如何に悲しく如何に淋しいか。そしてその悲しさ淋しさは心の底深く感じると云うよりは、寧ろ生きている肉の上にしみじみと譬えば手で触って見る事が出来るような気がするのである。フランスの詩や音楽がドイツのものとは根本的に相違するの**も及ち此処**であろう。ミュッセを産んだフランスにゲーテは現れず、ベルリオを生んだフランスにワグネルは出ない..... 南の方優しいフランスの**自然が齎す悲哀**の中には云いがたい美が含まれているので、人はその**悲哀によって何物かを思い何物かを悟る**というよりは、直ちに**悲哀と云うその美に酔うて恍惚として了うのである**。

これは長年恋焦がれ、あこがれていたフランスの地をようやく踏むことができた永井荷風が、帰国した明治41年夏後、憑かれたように続々と発表した短編集「ふらんす物語」からの一節です。ほぼ100年前の文章ですが、今日読んでも合点がいくように感じます。さらにそれはルイ・クープランという、今年没後350年を記念する音楽家、さらにはその甥フランソワの音楽にも脈々と流れているフランス的な美の本質を言い得て妙とも思います。

ルイ・クープランが故郷のブリ地方からパリに出てきたのは1650年頃、ルイ14世が舞踏にうつつを抜かし、自らも舞台に立ち始めた頃のことです。宮廷では自国の様々な地方や外国から齎された舞踏等を、宮廷人の服装や動作、好みに合わせて、洗練された内容へと変えて行きました。まさにフランス音楽の基盤は直接、間接的に、舞曲にあるといえましょう。ルイの作品は、手稿譜として現存しているのみです。主要なのは1660年頃写譜されたポーアン写本と、1690年頃のパルヴィル写本です。前者では同じ舞曲を調性別に整理しています。ルイ自身は、様々な舞曲を興味深く組み合わせるという考えを持っていたようですが、それが実際はどのようなものであったかは、わかりません。しかしヒントは死後に書かれたパルヴィル写本に見られます。ここでは同一調性を取り、異なる舞曲をグループとして組み合わせているのです。ルセ氏もそこからアイディアを得て、2つの組曲を演奏なさいます。即興的でありながらきちんと文節を持ち、低音の動き、上声の美しさ、内声、それらの声部間の模倣等、自由の中に規範を感じさせるプレリユードに続いて、流行の様々な舞曲、すなわちアルマンド、クラント、サラバンド、ジグ等が並びます。最後に置かれるシャコンヌは、甥フランソワの第17組曲(オールドル)の最後の方に出てくるパッサカリアと共に、特にフランスの作曲家による名品の多いジャンルです。一般に前者は速め、後者は多少

憂愁に充ちた性格を持つといわれます。短い定型バス上で変奏が繰り返り広げられ、他の舞曲に比して大曲という印象を与えることでしょう。なおこのジャンルに限らず、長い時間を制御するにあたり、フランスの音楽家は同じ音形を繰り返し奏するやり方を、ことのほか好みます。この方法は、マンネリを感じさせるところか、感情を高揚に導くために、見事な手段であることに気付かされる瞬間です。

さて**フランソワ**も伯父同様に舞曲を得意とし、多様な内容を組み合わせて27曲の組曲を残しました。本日はその中から2曲をお聴きいただきます。まず両クープランの作品を比較してどなたでも気付かれることでしょうか、フランソワの場合、不思議な表題が付けられる曲が多いのです。本日の表題の意味は、あたらずとも遠からず、わかりやすいですから、講釈は控えさせていただきます。ただし一言。《クラヴサン曲集》第2巻第8オールドルの最後に置かれ、軽くとてもなめらかにとコメントがつけられた12/8のジグは、作曲家ジャン・バティスト・モランの娘の肖像です。

フランスの美は感覚に直接訴えるもの。しかしフランス人が議論好きで合理主義者であることも、よく知られる所です。当時の知識人の話題はフランス音楽とイタリア音楽の比較、チェンバロの調律の仕方等、口吻泡を飛ばす勢いだったようです。そのように分析的で理性的な面は、楽譜の書き方に現われます。各楽曲の舞曲名や表題、テンポ表示、調性の選択、不可思議な拍子記号、発想標語、種々の装飾音等を通して、一般に音楽事典で解説される舞曲の説明文の枠を、微妙に越えたニュアンスを表現しようとしていることが読み取れます。さらに音の綾なすテクスチュア、すなわち不協和音の微妙な分量、各声部間の模倣や掛け違うリズム。まさに芳香漂うフランスの美は、細かく考えぬかれた作品と、その微妙さを自然に表現する演奏者の腕前を通して、醸し出されるものでしょう。

本日はクープランを演奏するに最適と考えられる楽器を、特にフランスから運んでいただきました。ストラスブールから南へ約70キロに位置するコルマルの博物館に、アントワープの名工ヨハネス・リュッカーズが1624年に製作し、一般にはプレミッシュ様式と呼ばれる楽器が所蔵されています。この楽器は1680年頃からフランスのコンデ城に置かれ、時代の要求に応じて改造されましたが、1979年に現代の名工クリストファー・クラーク氏により修復されました。そして同楽器に接したマーク・デュコルネ氏が、1995年にコピーして一気に製作したのが、本日使用される楽器です。若き日の同氏の気力が結集されたような力作です。音域はGG-d3と狭いですが、深い低音、くっきりした発音、長い余韻等を持ち、両クープランの細かい工夫のほどを聞き取っていただけることでしょう。

荒川 恒子（あらかわ・つねこ）  
音楽学者、リコーダー奏者。  
東京藝術大学大学院音楽研究科修了後、学術交換会奨学生としてドイツに学ぶ。山梨大学名誉教授。国際古楽コンクール<山梨>実行委員長。「バロック音楽研究会」代表として『ドレスデン 都市と音楽』等を上梓、アンサンブル「ムジカ エテルナ 甲府」主宰。

私がここにチャリティ・コンサートを開くのは、今まで5回以上訪れている日本に強い絆を感じ、皆さまにお見舞いと連帯の心を表明したいと思ったからです。

クリストフ・ルセ

© Caroline Doutré

あなた方の国の大震災を知り、悲しい想いで一杯です。日本の被災者の方々と日本の音楽の友人たちに、何かして差し上げられないか—あの津波の1週間後、ルセの素晴らしいリサイタルの最中に、考えが決まりました。私はすぐさま彼に、日本に行ってリサイタルを開こうと提案しました。即座に賛同した彼と、日本を訪れるのは私の喜びであり、ルセの決断を誇りに思い、感謝しています。

マーク・デュコルネ Marc Ducornet

チェンバロの巨匠であるルセを迎え、この演奏会のために空輪されたデュコルネの銘器で、2大クープランの馥郁たる豊かな感性に満ちた作品を聴く喜びを皆様と分かち合える—この「夢」を東日本大震災の1週間後、デュコルネからの「日本を応援したい、東京と大阪でぜひやってみないか」との暖かい申し出のメールがありました。これは是非とも実現させなくてはと多くの方にお話した所、ぜひやりましょうというお励ましと大きなご協力のおかげで、今宵、大阪は私たちの町茨木で実現させる事が出来ました。

阪神大震災の後、関西を訪れる演奏家は随分少なくなりました。歴史と伝統のある奈良、京都、異国情緒あふれる進取の感じられる神戸、経済と人情の大阪が、震災後十数年経ち、やっと持ち直しそうな気配を感じていた時に、関東東北を襲った未曾有の地震と津波、誰もが私たちのあの頃の記憶がよみがえり、これからの日本の未来を考えずにはおられなかったと思います。皆様もこのような状態の中で、望んでも得られないお申し出に友情と勇気をいただいと感じて下さったと思います。

思いがけず多くの方がご来場頂き、ご不自由をおかけする事になるのではと案じていますが、是非ともルセの音楽を聞きたい、片隅でも良いからとの熱い思いに、有り難いことと感じました。

又フランス大使館始め、関係各位のご支援、茨木市文化振興財団のご協力にも、衷心より感謝申し上げます。

オワゾリアル会代表  
井岡 妙